
教職教養対策 演習

教育原理 第1回（前半）

【問題1】正答5

- ア 正しい。フランスのアヴェロン地区コーヌの森で1797年に発見され、1800年に保護された野生児をアヴェロン野生児といい、ヴィクトールと名付けられていた。言語の使用や人間的な感情もない状態であったが、その後イタルを中心とした教育によって感覚機能の回復、思考の面での進歩がみられた。しかし完全な知的能力の回復にまでは至らなかった。
- イ 正しい。1920年インドの西ベンガルの森で発見されたアマラとカマラは養育を放棄され浮浪している所を保護された。孤児院を運営していたシング牧師夫妻から保護され教育を受け、当初動物のような行動傾向を示していたものの徐々に行動形態が変容した。しかし十分な人間性、知的発達の獲得はみられないまま死亡した。
- ウ 正しい。野生児の教育の限界から、人間の教育には一定の限界年齢があると考えられている。中でも言語の獲得や直立歩行では幼少期の言語環境がきわめて重要な要素となっている。生後2～3歳頃まで十分な言語環境が与えられないと、母国語の獲得がきわめて困難であると考えられている。
- エ 正しい。ドイツ観念論哲学の祖と呼ばれ啓蒙思想家であったカントは、選択肢にあるよう『教育学（講義）』において教育の必要性を主張した。そのなかでは選択肢の記述の他に「人間は教育によってはじめて人間となることができる」とも述べている。よって不適切なものは無いため、5が正答となる。

【問題2】正答2

- 1 誤り。習熟度別学習についての説明である。モジュール学習は10分程度の短い時間を設定し、様々な課題に取り組む学習形態を指し、集中力が途切れにくく、課題に向き合いやすい点が長所とされる。
- 2 正しい。問題解決学習は、教育学者デューイなどが提唱した児童主体の教育形態である。教師が何を指導するかではなく、子供が何を学び、どう考えるかを重視した教育を総称して児童中心主義的教育という。
- 3 誤り。ティームティーチングは、複数の教師がティームとして子供の指導に当たる形態をいう。教師の特性が生かせる反面、指導方針の不一致や個々の教師の緊張感の欠如などの課題もある。
- 4 誤り。発見学習についての説明である。完全習得学習はブルームが提唱した学習方法で、形成的評価など評価形態を工夫することで定着を促し、定着率を高めることを主眼とした教育方法である。
- 5 誤り。プログラム学習は小段階を、学習者のペースにあわせて提示し、即時反応を前提として行う学習で、その際の課題の提示は「不規則的に配列」ではなく「段階的・系統系

な配列」で行うのが望ましい。

【問題3】正答3

- A プログラム学習は1950年代、アメリカのスキナーによって提唱された「スモールステップの原理」やフィードバックの原理をもち、児童生徒にプログラムを与え、個別に学習を進めさせながら目標に到達させる学習方法。
- B 発見学習はブルナーが「教育の過程」の中で提唱した学習指導方法。科学上の発見と同様な思考過程を子どもたちにたどらせることにより、知識を獲得させようとする学習方法。
- C 完全習得学習はブルームが提唱した学習理論で教育目標を適切に分類し、適切な評価方法を用いることで、学習者が教育内容をより確実に習得することを目指した。

§ 補足 §

(1) ブルームの教育目標 (3 領域)

①認知領域 ②情意領域 ③精神運動領域

→教師も学習者も目標をより明確に把握し、学習がより促進する可能性が高まる。

(2) ブルームが3分類した評価

①診断的評価 ②形成的評価 ③総括的評価

→形成的評価の重要性を指摘した。

- D 有意味受容学習はオズベルが提唱した具体的操作期以降の学習で、学習に先行して与えられる抽象化された情報である先行オーガナイザー (学習に先行して与えられる抽象化された情報) によって学習が容易になるという考え方。とりわけ言語による説明を用いた概念の学習が十分有効で、発見学習より有意義な学習が可能であるとした。

【問題4】正答4

- 1 正しい。6人グループで6分間話し合いするのが最も効果的であることから6・6討議とも言われている。
- 2 正しい。ブルナーが「教育の過程」で提唱した学習指導法。1959年にスプートニク・ショックを契機として、理数系の科目のカリキュラム改革を意図して開催されたウッズ・ホール会議の議長を務めた際、その記録をもとに書かれたのが「教育の過程」である。
- 3 正しい。指導形態には大きく「一斉指導」「グループ指導」「個別指導」の三つの形態がある。それぞれの特性を把握し、これらを組合せることで効果のある指導が期待できる。一斉指導は以前から子供の個々の状況に対応しにくいという短所が指摘されてきたが、効率的な知識伝達が可能である点や、教師の人数調整などの点から現在でも学校教育の中心的な指導方法となっている。
- 4 誤り。プログラム学習についての説明である。「プロジェクト・メソッド」は、20世紀前半アメリカのキルパトリックがデューイの経験主義教育理論を具体化した方法。「目的

→計画→遂行→判断・評価」という最初に目的を設定し、実行計画を立てて遂行し、最後に評価をするという4つの過程を踏ませる。学習者は生活の中から課題を見出し、自主的に解決する学習方法。

なお、プログラム学習はスモールステップの原理や、フィードバックの原理を用いるなど、細かく刻んだ教材内容を順次に配列して、プログラムに沿って学習を進め、目標に到達させるもので現在はデジタル・マルチメディア教材の研究開発が主流になっており、今後は「反転学習」など新たな学習形態によってCAI（コンピュータ支援教育）の一環としてプログラム学習は活用されていく。

- 5 正しい。範例学習は、選択肢にあるよう膨大な学習内容の中から応用性の高い事例(範例)を精選して学習し、他の分野に拡大させていく学習方法である。学校教育では時間が限られるためこうした範例を通して学習することが要求される。しかしただのダイジェストになる危険性も指摘されているため、学習の転移性を十分考慮した配列や工夫が必要となる。

【問題5】正答5

- 1 正しい。ソクラテスは問答法（産婆術）と呼ばれる相手と質問と回答を重ねていくことによって、相手の理性や考えを引き出し、高めていくという方法を主張し実践した。
- 2 正しい。ヴィットリーノは運動や娯楽を適宜織りまぜながら楽しみつつ学習し、共同生活を中心とした全人教育を実践したグアリーノを師とし、これまでの宮廷学校を喜びの家に改め、人文主義教育を展開した。
- 3 正しい。モリソンが提唱したモリソン・プランは学習単元を組織して「探求・提示・同化・組織化・発表」の5段階で展開され、テスト・評価・指導を繰り返して、学習の完全習得を図り、学力の向上を狙うものであるとしている。
- 4 正しい。クロンバックは個々の学習への興味関心や意欲・能力などの適性と、カリキュラムや指導の手法、課題・関わり方・学習環境などの相互作用が学習効果に違いを生じさせるという適性処遇交互作用（ATI）を提唱した。
- 5 誤り。ナトルブはドイツの哲学者で教育学者。「人間はただ人間的な社会においてのみ人間となる」と著書で述べ、教育の根本を知性の陶冶だけでなく、「意志の陶冶」とし、教育は社会との関係なくしては教育されえない（人間は人間社会に生まれて人間的な社会生活をとおして「真」の「人間」になることができる）と説き教育を社会の側面から捉えようとする社会的教育を創始した。主著として、「社会的教育学」がある。

【問題6】正答2

- 1 誤り。「教授」についての説明である。「訓育」は教師が子どもに道徳的な教育を行う際、教師と子どもへの直接的働きかけによって成立する教育作用であり、教科外教育や徳育がこれに該当する。
- 2 正しい。児童生徒の実態及び特質、家庭や教師の教育観などを考慮された教育目標を設定

定する。

- 3 誤り。「学習の転移（単に転移ともいう）」の間違い。獲得された知識・技能や精神活動は他の物事の学習を助けるという考え。
- 4 誤り。陶冶は、「身につける」、「定着する」という意味である。陶冶には実際の知識や技術などを習得する実質陶冶と、考えや精神がある方向に変容する形式陶冶がある。選択肢の記述は後者のものであり、実質陶冶ではなく形式陶冶が適切。
- 5 誤り。教育の目的は、教育基本法第1条に定められている。そこには「人格の完成」をめざすこと、「国家、社会の形成者として必要な資質や能力」を育成すること、「心身ともに健やかな」人間を育成することを指摘している。

【問題7】正答5

選択肢の判断は比較的容易にできる。

まずAでは自由に意見を述べ合い、アイデアを出すことを主眼とした点からブレインストーミングとわかる。ストーミングは、「嵐」を指す語で、アイデアを次々出していくその様から名付けられている。Bは「画像」とあることから、フォトランゲージであることが判断できる。実際の授業でも、ただ画像を見せて終わりとせず、このように意見や感想を引き出し、興味関心を高めつつ、思考力を養うことに役立たせている。Cは「仮想世界」を設定し、その中での活動という記述からシミュレーションゲームとわかる。Eのある役割をあたえ、その達成を目的とするロールプレイングと混同しやすいので注意したい。Dは残った選択肢からランキングと判断できる。

【問題8】正答5

ア 誤り。ペスタロッチの説明である。彼は生活自体が子どもの精神・道徳・身体を育て、教育してくれるという労働による人間陶冶を唱え（3H's思想）、晩年の著書である「白鳥の歌」では、「生活が陶冶する」と述べている。

ヘルバルトは教育の目的を品性の陶冶と述べ、道徳的性格の完成を目指した。また教授の仕方として「明瞭・連合・系統・方法」の四段階教授法を提唱した人物。

イ 誤り。カントの説明である。ルソーは教育は自然と事物と人間によって行われると考え、この三者が一致するためには、人間の手によって操作することが出来ない自然による教育に、事物による教育と人間による教育を合わせればよいと著書「エミール」で主張。積極的に子どもに働きかけるのではなく、出来る限り子どもの自然の感性に即して伸ばしていくことを重視しており、消極教育と呼ばれている。

ウ 誤り。アリストテレスの説明である。プラトンはアカデメイアとよばれる学校を開き、「国家篇」で教育論をまとめたことで知られる。なおアリストテレスは、リュケイオンと呼ばれる学校をつくっている。当時の哲学者と学校の組合せは頻出であるので、教育史で確認しておきたい。

エ 正しい。デューイは主著「思考の方法」にて、問題解決学習の理論を掲げ、学習を「問

題点の抽出・疑問点の整理・解決のための仮説の設定・吟味・検証」の五段階からなると提言している。またこの問題解決能力を身に付けた市民による進歩的社会の構築を唱えた「民主主義と教育」を著している。

オ 正しい。コメニウスの主著はラテン語教育の手法を軸に書かれた「大教授学」や「開かれた言語の扉」のほか、子どものための絵入り百科事典「世界図会（絵）」などがある。よってエとオが適切な組合せとなり、正答は5となる。

【問題9】 正答3

- 1 誤り。ブルームが提唱した学習理論。学習評価を診断的評価・形式的評価・総括的評価の3つに分類した。尚、ランカスターが提唱したのは助教法（モニトリアル・システム）で学力の高い子どもをモニター（助教）とよばれる教師の補助者として指導に当たらせる教授法である。
- 2 誤り。生活単元学習を唱えたのはデューイである。子どもの生活を中心として教育を組み立てるという考えから、カリキュラムを構成しようとした。その結果、従来の学問の体系に即した教科の枠組みではなく、子どもの生活を単元とする生活単元学習という考え方に繋がった。生活単元学習においては、子どもにとって生活上の困難が課題とされ、これを解決するプロセスに注目し、問題解決学習が展開されることとなる。
- 3 正しい。学習する側が既に獲得している認知構造の中に新しい教科内容を予備知識（補助教材）として提示し、有効な関連づけ（先行オーガナイザー）をしながら意味を理解していく。
- 4 誤り。プロジェクト・メソッドについての説明である。生活の中から課題を見出し、自主的にこれを解決していく学習のことで、キルパトリックはこうした方法こそが豊かな成果をもたらすと主張した。
- 5 誤り。ブルーナーが提唱したのは「発見学習」である。著書の「教育の過程」は頻出であり確認しておきたい。科学主義教育と呼ばれる教育内容変革運動の中心を担い、教育内容の現代化運動とも呼ばれ、後に日本の学習指導要領改訂（第3次改訂1968年）にも影響をあたえる。

【問題10】 正答4

- ア イエナ・プランは学年別学級を廃止し、指導する側と指導される側の両方の立場を体験させる学習法。
- イ マスタリー・ラーニング（＝完全習得学習）は教育目標を適切に分類して適切な評価方法を用いることで、全ての子どもに対する学力保証を実現しようとする授業論。
- ウ ウィネトカ・プランはウォッシュバーンらによって実践された学習法のことであり、教科を共通基礎教科と創造的集団活動の二群に分けた。共通基礎教科の読み書き計算については個人別の練習帳・自習教材を用いた個別的学习指導の形態をとり、創造的集団活動は、子どもたちの興味関心に沿った取組みが許容され、厳密な到達目標などは設定していない。

-
- エ 範例学習は多数の教材の中から、基本的・本質的なものを厳選して実際の例や範例を通じて学習し、基礎的な理解を得られるようにする学習法。
- オ ドルトン・プランは主要教科と副次教科に分け、教科別に参考となる教具や参考書を備えた実験室にて子どもが自学学習する方法である。日本でも大正時代の新教育運動の流れのなか成城小学校など数多くの学校で取り入れられた。